

収録・解説・酒井 隆董
イラスト・福本 美男



語り手 春木 務さん（明治44年生まれ）
収録・昭和61年8月18日

あらすじ

とんと昔があつたげな。キツネとカワウソと、それから猿が塩と小豆とゴザを拾ったげな。それでキツネが言うことには、「おまえ、猿さん、木の上にいでだけん（いるのだから）、ゴザがいいかも知れん」とゴザをやった。それからカワウソには、「おまえは水のああとこにおつてだけん、塩気がなからうから塩を持っていんだらええ」。カワウソは塩をもらつて行く。キツネは、「ほんなら、おら、小豆持っていぬる」と持つて帰った。明くる日になつた。猿は木の上にゴザを敷いて寝たら、滑つて大怪我をするし、カワウソは塩が溶けてなくなつてしまつた。ところが、キツネは小豆を腹いっぱい食つた後、小豆の皮を顔の方にひつつけて、一人が怒つてやつて来たら、「ううーん、おらもおまえ、ものが出てえらい目にあつた」と言つて、二人をだましたといふことだ。

解説

つぼし。
当時、大谷小学校校長だった錦織明氏の紹介で、語り手を知つたという記憶がある。春木さんは出雲方言そのままの素朴な語りで、筆者の希望に応じて次々と語つたり歌つたりしてくださつたものだった。
あるときは島根大学の私の研究室に、アメリカのセントラルワシントン大学から留学していた、アリータさんをつれ春木さんをお訪ねして歓迎していただいたこともあつた。
さて、「キツネとカワウソと猿の拾いもの」について解説しておく。
関敬吾『日本昔話大成』によれば、動物昔話の「動物分配」の中にある「猿と川獺の交換」に次のように話型として紹介されている。
1、猿は豆の実を食ひ、皮はからだにはりつけて水に潜るとよけい魚が獲れる主張、川獺は莫産は木の上に敷いて寝るとよく睡れるといつてお互いに交換する。2、猿は川獺のいふと交換する。川獺は一睡もできなかったと、川獺

は一匹の魚も獲れなかつた、お互いに交換した者を返すことにする。
類話は東北から九州まで分布している。ただ福岡県築上郡や高知県高岡郡などではキツネに代わつてタヌキが主人公になっているが、どちらかというとキツネの方が多いようである。また、県内では大田市富山町や江津市都治町に類話が見られるが、大田市の一例ではキツネとタヌキの両者の場合が別個に存在し、江津市の方はタヌキとなつている。
ここ玉湯町ではキツネが主人公で、その知恵を生かして、狡猾者たる本領を發揮し、人のよい猿やカワウソを騙して、一人だけよい目を味わうといふ結果で終わつていく。ここで思い出されるのが似た話の「猿蟹合戦」である。
ところが、今回の話では「猿蟹合戦」での蟹の柿を独り占めした猿に見られるような罰を受けるようなことはない。もっとも後者の猿は被害者になつている前者のそれと違い、性格が反対で、こちらの方が狡猾者に仕立てられているのである。
（元島根大学法文学部教授）